

# 歴史探訪

## クラブ

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局3635  
FAX 22局3811

### 渥美半島の葉タバコ栽培②

葉タバコの栽培には、ほかの作物にはない特徴があります。収穫後にタバコに加工・製造が行われる工芸作物であることです。また栽培は日本専売公社（現在は日本たばこ産業株式会社）が管理し、その需要に応じて栽培をしていました。最も大きな特徴は、栽培農家が葉の乾燥までを行っていることです。

日本で栽培された葉タバコの黄色種は、人工的に乾燥させなければいけないので、栽培農家は乾燥するた

めの施設を作りました。

当初は、二間（約3・6m）四方の木造土壁の乾燥室が作られました。切妻瓦葺の屋根に、越屋根と呼ばれる排気のための小屋根がのっけています。他の建物と違いずんぐりとした塔にちよこんとのつた越屋根が、かわいらしさを感じさせます。この中に葉を藁縄で結んでつるし、下から薪で火をたき、その熱で乾燥させるのです。少しでも効率よく乾燥させるため、縄でつるした葉を4・5段にも上につるしていくので、このような構造となっていました。

葉タバコの乾燥で重要なことは、ほどよい乾き具合と発色です。仕組みは単純ですが、温度管理などは長年の経験と技術が必要です。乾燥は三日三晩も行う過酷な作業ですが、ここで仕上がりに大きな差がでるのです。燃料は、初めは薪でしたが、次にコークス、その後は灯油が使われるようになりました。建物は鉄骨造など、素材はさまざまだったよ



●今も残る木造の葉タバコ乾燥室（高松町）

うですが、大草町ではコンクリートブロック造で作られていました。さらに乾燥室は、既製品のコンテナへと変化していきます。栽培が盛んだった中山町では、組合でコンテナを入れる共同の乾燥施設を作り、組合員の乾燥作業を効率化していたそうです。

渥美半島で一時代を築いた葉タバコ栽培。かつては国道42号を走ると、赤土の畑にポリウムのあるタバコの葉の緑が夏の日差しにまぶしく感じられたものでした。最近この景色を見ることがなくなったので、葉タバコ栽培の記録を少しでも残す必要を感じ、大草町の太田良治さんに取材をしたのです。お話を伺った中で、

特に印象に残ったことがあります。

「葉タバコは栽培と乾燥加工の二重の難しさがあり、どちらもうまくいかなければいけない。だからこそ自分の理想とした出来栄えに喜びも二重だった」と誇らしげに話されたことでした。また、時代の移り変わりに対応した栽培方法や農具、農材の变迁は、実に興味深いものでした。

葉タバコに限らず、農家の皆さんは、さまざまな工夫や努力をされているんだと、また私の「田原自慢」が増えました。そして、これらの渥美半島を支えた産業を、少しずつ書き留めておく必要を感じました。

【お詫びと訂正】10月15号の歴史探訪クラブの2段目9行目の「神戸町」は「神戸村」の誤りでした。お詫びして訂正します。

（増山）

### 今月の「表紙」

▼渥美半島の秋の風物詩  
といえ、電照菊の夜景。

その絶好の夜景スポットから撮影しようとして、赤羽根文化の森へ登りました。目の前に広がる色とりどりの光のパノラマに、言葉も出さずに見とれていた私。時間が経つにつれ、次々とカラフルな光が灯っていく温室に、時代の変化を感じました。(O)

【表紙の写真】赤羽根文化の森からの電照菊の夜景